

## 「広木忠信に学ぶ集い」の来歴

(京都産業大学名誉教授) 所 功

西美濃の奥地(揖斐川上流)で生まれ育った私は、このような田舎からすぐれた人物が出ていることを知らなかった。しかし、大垣北高校に入り二年目の昭和三十三年(一九五八)八月、社会科担当の稲川誠一先生(32歳)に勧められ、初めて参加した「千早鍛錬会」(日本学協会主催)で、山崎闇斎門流の若林強斎作『広木忠信を祭る文』の講述を拝聴した。この忠信が何と郷里の揖斐出身といわれ、びっくり仰天した。

しかも、忠信(文蔵)の墓が揖斐町(現揖斐川町中心部)の長源寺に現存することを、戦後まもなく発見されたのは、のち岐阜県史編纂室長の吉岡勲先生である。同四十六年九月刊の『揖斐川町史』通史編は、その吉岡先生の指導により完成されたから、享保十五年(一七三〇)八月十八日(旧曆)、四十七歳前半(推定)に亡くなった「広木忠信」も略述されている。

一方、山崎闇斎と門下の研究者として著名な近藤啓吾先生が、同五十四年三月『若林強斎の研究』を出版され、京都で強斎に師事した忠信の墓参りに何回も来られた。その折に案内したのが、関市在住の後藤章嘉氏である。

また、同五十六年(一九八一)春に文部省から京都産業大学へ移って、揖斐の自宅より通うようになった私も、先生に随行したところ、「あなたは後藤さんと協力して、広木忠信のことを地元の方々にも理解してもらおう努力をしてほしい」

と言われた。そこで、同年の夏休みに長源寺の近くで有志数名と勉強会を始めたが、長続きしなかった。

けれども、平成二年(一九九〇)五月、吉岡先生(76歳)は、名著『山崎闇斎美濃国の門流』を著わされた。その凡例で、「私の関心は終始、広木文蔵(忠信)の生涯を明らかにするにあった」こと、その研究進展を喜ばれた恩師の平泉澄博士は、「(忠信の)お祭りをしましょう」と言っておられたが、六年前に数え九十歳で長逝されたことを特筆されている。

これを受贈して怠慢を恥じた私(48歳)は、直ちに後藤氏や従弟の橋本秀雄氏および一宮在住の広瀬重見氏などと相談し、忠信の旧居(三輪)近くの郷土史家広瀬隆之氏ら数名の協力をえて、九月二十九日、長源寺の墓前で略式の「広木忠信二百六十年祭」を斎行し、同寺の本堂で「広木忠信を祭る文に学ぶ」と題する拙い話をさせて頂いた。驚いたことに、そこへ歩行も不自由な吉岡先生が来て下さり、心温まるご挨拶を賜った。

これが正式な第一回の「広木忠信に学ぶ会」である。それ以来、今年(令和五年)まで三十三年間、コロナ禍で二回休会を余儀なくされたが、九月のお彼岸ころ、揖斐川町文化財保護協会の主催、揖斐川歴史民俗資料館の協力をえて、墓前祭と勉強会を続けてきた。しかも、その都度、本町ゆかりの人物などの研究報告を地元関係者にして頂き、ふるさと再発見の好機となっている。

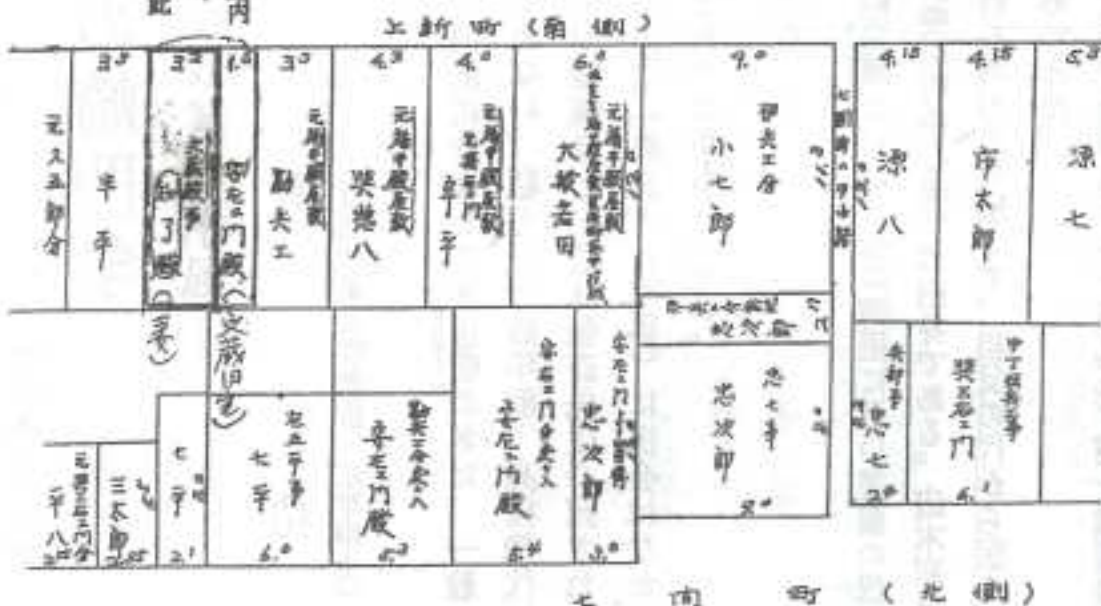
# 広木文蔵居住地

延享2年6月「掛斐町間口帳」により作成(高瀬隆之)  
(1745)

数字の単位は間

是ハ先年文蔵勘口五間三尺之内  
菅間五尺 掘井政名より割かし有  
二箇目 掘井政名より割取戻し如此

Copyright © 2011 by 高瀬隆之. All rights reserved. 延享二年六月



- 長源寺本堂裏に広木文蔵一門の墓が十基  
整然と一列に並んでいる。向かつて右から
- 一、実空祖心大姉 延宝八年(文蔵の祖母)
  - 二、雪月浄信居士 寛文二年(文蔵の祖父)
  - 三、**広木文蔵**  
(文蔵の父)
  - 四、明普智了之墓  
(文蔵の母)
  - 五、円寂郭了然庵主  
(文蔵の父)
  - 六、最誓智雄法尼  
(文蔵の母)
  - 七、妹福智貞尼  
(文蔵の姉)
  - 八、江月宗弥僧士  
(文蔵の父)
  - 九、掘りん墓  
(不明)
  - 十、掘井政名之墓  
(文蔵母の兄か)



六條お柳の夫水谷良庵五郎  
水谷浄土氏(二)墓修後

掘井政名は文蔵の同門学徒であり、美濃諸士伝記(橋本)の著述があるという。  
高瀬隆之の稿/河津武夫氏提供

日本学協会編『日本』平成二年六月号

(一九九〇)

忠信の生ひ立ち

# 美濃の崎門学

— 広木忠信の学風 —

所 功

(京都産業大学教授・法学博士)

山崎蘭齋先生の門流に連なる広木忠信の名は、一般にほとんど知られてゐない。私も三十数年前、高校時代に初めて参加した千早鍛錬会で、若林強齋先生の記された「祭(か)廣木忠信(か)文」(以下「祭文」と略称)に出会はずなかつたら、一生無縁であつたかもしれない。

## 忠信の生ひ立ち

広木忠信は通稱又瀬(か)といひ、私の御里に近い美濃の掛斐(か) (岐阜県揖斐郡掛斐川町中心部) の出身である。広木家は、天領の掛斐を治める岡田氏の配下で、祖父の代から医を業とし、庄屋を勤めてゐた。

しかし、父の玄知が元禄八年(一六九五)四十歳前後で歿したため、まだ八歳位だった忠信は、伯父(叔父か)などの援助をえて、母(最譽知雄法尼)の手で育てられた。やがて二十歳代に入ると、京都へ出て浅見綱齋の門に学ん

作(か)保(か)成(か)秋(か)八月(か)。  
若林(か)連(か)居(か)興(か)諸(か)友(か)謹(か)夜(か)。  
眞(か)酒(か)系(か)於(か)廣(か)木(か)忠(か)信(か)

広木文蔵忠信関係略年表

元和	二	一六八二	九月十六日、山崎蘭齋歿(65)
元禄	元	一六八八	この頃、広木文蔵誕生
"	八	一六九五	正月二十一日、父・良庵玄知歿(40前後)
宝永	二	一七〇五	秋、若林強齋(28)美濃に初出講
"	七	一七一〇	この頃、文蔵(23カ)上京し綱齋に入門
正徳	元	一七一二	十二月一日、浅見綱齋歿(60)
"	三	一七二三	春、強齋(36)上京開講、文蔵(26カ)開事
"	四	一七二四	正月十八日、忠信(27カ)帰省
享保	四	一七二九	五月十六日、忠信(32カ)「易経本義講義」写了。この秋、忠信、相澤、於沢と結婚
"	五	一七三〇	この年、娘・於澤蘭生(一文化四年歿)
"	六	一七三二	七月、忠信(34カ)高宮で強齋の口授筆録
"	九	一七三四	八月、強齋(46)美濃出講、忠信(37カ)接待
"	十五	一七三〇	八月十八日、忠信歿(43カ)、強齋(52)祭文
"	十七	一七三二	正月二十日、若林強齋歿(54)
寛保	元	一七四一	六月二十七日、母(最譽法尼)歿
宝暦	元	一七五一	この年、孫・水谷玄俊誕生(一文化三年歿)

(若林強齋自筆本・西依家伝来)

だが、程なく正徳元年（一七二一）十二月、師の喪にあひ、  
遺命により兄弟子の若林強齋に嗣事したのである。

### 望補軒における修学

それから数年間、忠信は強齋の「望補軒」で起居を共にしながら修学に励んだ。当時の様子は、同門の山口春水が編めた『強齋先生雑話筆記・同雑話統録』の中に散見する。それは日本思想大系「山崎闇齋学派」（阿部隆一氏校）及び神道大系「垂加神道」下（近藤啓吾氏校）に活字化され、誰でも見られるが、要点を抄出させて頂かう。（読み易くするために、片仮名を平仮名に直し、送り仮名を少し加へ、説明語を括弧内に補った。）

(一)「強齋」曰く……文蔵が居る中は、昼は事多くなりがたく候ゆへ、夜々に近思録・中庸・同或問・雜論などの口授を申付て、寝られぬときは何時とは定めず、夜中でも夜明でもたゞ起き起して書かせ候。……文蔵はきはめての式次第にて候ゆへ、そこはよく勤めたことにて候。

(二)「強齋」先生に始めて参上の節は（享保三年）、先づ裏の講座（講義の部屋）に通り居る様に、とのことにて、廣木文蔵案内にて講座に参り居る。其時は（二条下ル）堺町の西側御住居にて、家の間口も狭く、講座と云ふも

狭きことにて、其頃までは別して清齋の御様子なり。……辞し去つて、戸外に出づれば、文蔵の御うはさの声きこゆる。……」

(三)「先生曰く、手前（強齋）今よりも清齋なる頃、文蔵の心いれ過分なることなり。鼻紙なども私底なるに、風邪（風邪）を引き鼻をかめば、文蔵紙をあてがふ故に、これは求むるか問へば、否や私が紙にて候、御遠慮なく御使ひなされよ、費にもなり申さずと答ふるによりて、辞退に及ばず心のままにかみ棄てぬ。……手前には新しき紙を使はせ、其身は乾かしたる鼻紙をつかひしなり。」

(四)「先生曰く、文蔵は見らるゝ通り率直に不調法なる生れ付なれども、感懐して頼もしき処有る男なり。此節、子供追々相煩ひ不幸の義などを聴いては、聞きながしにしては居らぬ男なり。先達て、あらましの様子も云ひつかはしたれば、……文蔵御見舞に参りたることとなり。先生、さこそあらんと思ひしことよ、とて御悦あり。」

(五)「先生曰く、手前酒が飲みたくなる折節、酒なれば……文蔵一人、醜然として何の心もなく、真鍮拵への大脇指を指しはらし……買ふてくる、はれやかな気象なり。さて文蔵も一つ呑むゆへに……そこで肴と所望すれば、言の下より歌ひ出す。生国の粉ひき歌さうにて、

如形無風流の歌なり。俗氣を離れ切つて面白き事なりしが、文藏在処（郷里）へ帰りては、左様の相手なし、と御物語なり。」

これによれば、在塾中の忠信は、「率直にて不調法なる生れ付」ながら、「頼もしき男」で、「はれやかな気象」「心いれ過分」「俗氣を離切つて面白き」、まことに明るく優しく柔しい純情な人柄に対して、全幅の信頼を寄せられ、塾頭格として入塾者の世話をすると共に、儒書の「口授」を夜中でも筆録するほどの大役を任されてゐたのである。

忠信の筆写本と『壁書』

在塾当時、忠信は先師淺見綱齋の「易経本義講義」も筆写してゐる。若い頃から忠信の研究に情熱を注ぎ、晩年『山崎闇斎美濃國の門流・覚書』（岐阜郷土出版社刊）を著はされた故吉岡剛氏所蔵の右筆写本（大四冊）本奥書に、正徳癸巳十月朔日、始操筆於平安室町、而享保己亥五月十六日、写畢於堺町二条。廣木忠信

とある。もと室町（四条上ル）にあった望楠軒で勉学を再開した正徳三年（一七一三）から、やがて移った堺町（二条下ル）の塾を去る享保四年（一七一九）まで筆写したことになる。かなりの分量とはいへ、書写に六年近くも要し

たのは、強齋の手伝ひや塾生たちの世話などに多忙だったからであらうか。

このやうな先師の著作を筆写したり、強齋の講義や詩文を筆録したものは、他にも多々あったにちがひない。ただ、忠信自身の書いたものは、十数年前、近藤國智氏（神道史研究叢書『若林強齋の研究』の著者）が、強齋の郷里（彦根市高宮）で小林家（門人小林勝齋の子孫）において『壁書』と題する四枚綴の写本を発見された。これは紛れもなく「廣木忠信」の文を写したもので、その全文が、本誌『日本』昭和五十三年九月号に懇切な解釈を添へ紹介されてゐる。ここには要点を抄出させて頂かう。

(1)「……諸友つねに講席に往来するの次……或ひは閑言語・閑議論に渉るもの往々あり。……竊かにそのこれを致す所以の由を究むれば、則ち吾儕もまた（責を）免がる可からざるものあり。……むなしく光陰を度るのみならば、実に交游實善の義にあらず、而して自己操存の方に於いて、また甚だ宜しきところに非ざるなり。……乃ち何の面目ありて以て郷里に帰りて父兄宗族に対せんや。……」

(2) ここを以て敢て諸友に告ぐ。今より後、もし爾爾を辱うするあらば、伏して乞ふ、儼規警策、必ず回過せざるなり。過ちを改め善に遷る、必ず畏難せざるなり。およ

そ経義を論じ文字を解き疑難を講する、ただ虚心平氣、以つて義理至当の処を究むるを要し、意(自説)を立て、強弁し、必ず勝を取るを欲す可からざるなり。未だ解せざるの義、未だ決せざるの事、相共にこれを啗又(先生)に質し、敢て妄意にこれを論ぜざるなり。或ひは己れに独り(即ち)請ひ問うて衆(一般塾生)の与り聞かざるものは、即ちその録するところ(筆記)を以て伝写し、敢てみづから私せざるなり。人の善を聞けば揚言してこれに則り、人の惡を聞けば誠然して内に省る。毀誉利害の言は齒牙に交へず、惰慢邪僻の氣は身体に設けざるなり。

(3) もしそれ弓劍槍馬等の術は、則ち固より是れ実用に係る。或ひは能く経業の余暇に学べば、また以て才を広め氣を養ふの一端をなすに足る。……則ち本末序を得て而して功あらん。然らずんば則ち未だ為めに志を奪はれざるものあらざるなり。その害たるや甚し。此の意、最も知らざる可からざるなり。その他の無用不急の事は一切棄て、治めず。……

(4) ……思ふに、己れに損せず諸友に益ある所以なるか。乃ち遂に敢て言ひ、而してみづから強む。また祈る、以てこれを容るることあらば、千萬大幸なり。

享保戊戌(三年)十月朔旦、交を辱くする小生藤木忠信、謹しみて書し、以て斎壁に掲ぐ。」

これによれば、忠信の部屋へよく遊びに来る塾生たちが無駄話に耽つたりするのは、自分の責任でもあるが、塾においては「交游責善、自己操行」に努めるべきである。従つて、今後、私と切磋するために来室する友ならば歓迎して、お互ひ「虚心平氣」で「義理至当」を求めることに努め、不明な点は強斎先生のところへ行つて共に教へを仰ぎ、自分ひとりで聞いたことは筆記して皆に伝へる。どうか他人の善行は褒めて真似し、悪い点は黙つて反省するやう心懸け、また武術も学問の余暇にするならよいが、本末顛倒すれば有害無益と心得て、ひたすら勉学に意を用ひてほしい。この忠告を聴き容れない者は入室しても相手にしない、と宣言して壁に掲げたのである。

かやうに忠信は、塾頭格として、後輩たちに慕はれながらも、その指導に苦勞してゐた様子を窺ふことができる。と同時に、ここから隣門に学ぶ人々の厳格で親切的な塾風・学風の一端を察することもできよう。

帰郷後も近江高宮へ参学

しかし、やがて享保四年(一七一九)、忠信は「母の側

に人無き」ため婚嫁せざるをえなくなった。既に三十歳を越してゐたから、早速に結婚し（妻於沢、翌五年に歿於柳、誕生）、漢籍の素養を活かして医業を始めた。

けれども、学問を止めたわけではない。師の強齋とは常に文通を交はし、正月と七月、強齋の近江高宮逗留中は、搦髮がら出向いて教へを受け、手伝ひに努めてゐる。その一端が『雑話筆記』に次のごとくみえる。

（享保六年）七月二十九日晚、先生曰く、此度在所（高宮）にて「小学内篇」を講じ終り候。聴衆には、武士もあり、百姓もあり、色々にて候。……食物を人が世話にすれば心づかひ有之ゆえ、召連れ候直次郎、英濃より出迎へ候文藏などと共に、薪水（自炊）を取り申し候。

日々明六つ（午前六時）より午時（正午）まで講書いたし候。……講じ畢りては基だ草臥れ申し候ゆへ、枕について、さて文藏に口授にて「孟子浩然章」、記録をさせ申し候。……

この享保六年（一七二一）に強齋（四十三歳）が忠信（三十四歳か）に「口授」を「記録」させた『孟子浩然章講義』『廣木文藏筆録』は、字句の解釈だけでなく「歴史上の事実を例に引きながら、具体的に孟子の意の在る所を

説明し、読者の気を奮ひ立たしめるもの」（近藤氏前掲書）と評価されてゐる。

しかし、強齋が頼みとした忠信は、それから足かけ十年後の享保十五年（一七三〇）八月、怒馬と世を去つてしまつた。時に四十三歳前後、残された母は六十歳代なかばであつたとみられる。その墓は、戦後吉岡勲氏の非常な御努力により長瀬寺（揖斐川町三輪北新町）の境内から発見されたが、崎門の学者にふさはしく「廣木文藏墓」とのみ刻まれてゐる。

なほ、ごく最近判明したことであるが、忠信には妻子があつた。「人娘於柳は同町内の医師水谷圃庵に嫁し、その血縁を今に伝へてゐる。（愛知県一宮市在住）。

#### 「祭文」に仰ぐ忠信の学風

広木忠信に関する史料は極めて少なく、ほぼ叙上のごとき断片的なことしか判らない。しかし、その真骨頂は、師の強齋が忠信の急逝を悼んで覆前に捧げた「祭文」の中に、左のごとく見事に述べ尽くされてゐる。

夏扇がず、冬も炬に近づかず。艱難窮乏、日を合せて食ふこと、時にこれ有り。賢（忠信）少しも屈せず、益々勉め益々励む。而して余も亦た依れり。雪の朝、

月の夕、相与に茶を淹、酒を煖め、經を讀し義を論じ、  
今を悲しむ、古を慕ひ、情歎慷慨、心腑傾け竭し、  
相責むるに死生を以てせり。……

賢の人と爲りや、忠直にして事情に迂く、實朴淳樸、  
以つて外飾を惡む、いはゆる剛毅木訥近仁とは、蓋  
し此の如きか。其の学たるや、名利を求めず文辭を  
事とせず、惟義を是れ務む。いはゆる爲己之学とは、  
けだし此の如きか。若し夫れ感慨奮激、盃を挙げて悲  
歌し、死生利害を顧みざるの氣象は、則ち実に  
古人義烈の風あり。……

何と鍊磨の嚴しく、何と氣象の激しいことであらうか。  
しかも、それは決して肩を怒らせた嚴しさ激しさではない。  
ひたすら經書により学びえた道義に照らして、古今の歴史  
と現実を直視する時、おのづと心昂ぶり、師弟相携へて、  
「死生」を共にする覚悟まで誓ひあふ、純粋な至情が漲っ  
てゐる。強齋は後段で忠信の人と爲りを表はすのに「論語」  
の一節を二度も引き、死生も利害も顧みない「義烈の風あ  
り」と稱へてゐるが、それは備門学における理想的な学徒  
の具休像として絶賛するに値したのであらう。

確かに、父の早逝により生活さへ樂でなかつたと思はれ  
る文蔵が、幕府全盛の當時、朝威の復興を志す備門の学に

関心を寄せ、損斐の田舎から遙々京都へ上り、十年前後も  
遊學したこと自体、尋常一様ではない。しかも、先師綱齋  
が亡くなると、兄弟子の強齋に師事し、やむなく帰郷して  
からも引き続き勉學に勵んだ、その謙虚さと真剣さは、正  
に忠直・實朴にして「己の爲にする学」を求めてやまない  
備門学徒の「典型」にちがひない。

ちなみに、文蔵の「忠信」といふ名（諱）は、おそらく  
備門に入つて師から頂いたものであらう。手もとの「大漢  
和辭典」には、忠信の出典として左のやうな用例をあ  
げてゐる（一部省略）。

『易经』（文言）「忠信は徳を進むるゆゑなり」

『礼記』（礼器）「忠信は礼の本なり」

『大学』「君子には大道有り必らず忠信もつてこれを得」

文蔵の場合、右のどれを典故としてゐるにせよ、「忠信」  
の本義（誠を尽くし偽らざること、忠実で信用があること）  
を自らの理想とし、その号にふさはしい人生を實踐したこ  
と、叙上の通りである。このやうな広木忠信を、私は最も  
身近かな備門の先學と仰ぎ、少しでもその純眞な志を今に  
受け継ぎたいと念じてゐる。

尚、本稿を草するにあたつても近藤啓吾・吉岡勲両先生  
の御論著（文中引用）に多大な学恩を蒙つた。